

関西学院大学 先端社会研究所紀要 第12号

Annual Review of the Institute for Advanced Social Research vol.12

■ 特集3 先端社会研究所定期研究会 ■

第4回先端社会研究所定期研究会（「南アジア／インド班」第2回研究会）

講師：栗田 知宏 氏

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー

* 講演時は東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

題目：「エジアン音楽という「一体性」とその多様性——在英南アジア系ポピュラー音楽の現在」

日時：2012年12月14日（金）16:00～18:30

場所：先端社会研究所セミナールーム

司会：鈴木 慎一郎

はじめに——コーディネーターより

第4回定期研究会コーディネーター・鈴木 慎一郎

（関西学院大学）

先端社会研究所の共同研究プロジェクトのうちの「南アジア／インド班」では、2012年12月14日開催の定期研究会において、文化社会学・ポピュラー音楽研究・在英南アジア移民研究を専門とする栗田知宏氏を招き、研究報告をしていただいた。今号の紀要に収録されているのは、報告で実際にお話しされたことを逐一文字化したものではなくて、栗田氏ご本人による縮約（紀要に収まるような分量に合わせるため）とアップデート（報告からかなりの時間が過ぎているため）とを経たものであるということ、最初におことわりしておく。そのうえでここでは、栗田氏による研究報告の記録を読んでいく上での、いくつかの補助線を引くような作業を行なっておきたいと思う。

まず心に留めておかななくてはならないのは、複製芸術としてのポピュラー音楽が持ちうる、越境性や脱領土性への視点である。何らかの民族的または国民的な特徴を有した文化が一定の地理的領域の内部で実践されている、という図は、ポピュラー音楽に関しては使い物にならないことが多い。ローカルまたはナショナルな音楽実践にトランスナショナルまたはグローバルな音楽産業が及ぼす影響力は、概して大きい。とりわけ、アメリカ合州国のポピュラー音楽においてその時々メインストリームに位置する音楽ジャンルは、20世紀を通じ、中心以外の場所で無数の模倣者たちを生んできた。栗田氏が言及しているものの中では、ディスコ・ミュージック、ヒップホップ、R&Bなどがそうした音楽ジャンルにあたる。アメリカ合州国発のものだけでなく、1980年代後半の英国の都市を一つの端とする、クラブ・ミュージックというジャンルもまた、さまざまな社会的範疇を横断する形で浸透していった。

強大な中心（それは一つだけとは限らない）から伝えられてくる、人種的・民族的・階級的に無徴化された音楽を、歴史的に周辺に置かれた、人種的・民族的・階級的に有徴化された者たちが模倣する——この惑星のポピュラー音楽史は、乱暴な形ではあるがそのように描くこともできる。中

心に由来する音楽ジャンルは、すべての周辺における音楽実践をくまなく均質化したわけではない。有徴化された者たちが行なったのは、音楽産業のヘゲモニーとの交渉でもあった。栗田氏が言及しているものの中でいえば、エイジアン・アンダーグラウンドという音楽実践は、(ワールド・ミュージック市場という、音楽産業内ではニッチ市場ではあるが個々の音楽家からすればそれなりに強大な) 他者から期待されるエキゾティシズムと、「アジア系」として有徴化された音楽家との、交渉の産物でもあった。

栗田氏が報告の第4節でその活動軌跡を詳しく検討している音楽家、ジェイ・ショーンも、ブリティッシュ・エイジアンという有徴化された集団に出自を持つ一人として、アメリカ合州国由来のヒップホップや R&B を模倣し、それらにかかわる音楽産業との交渉を行なってきた。とは言え、事情はもう少し複雑なようだというのも栗田氏の報告は伝えてくれている。たとえば、特に21世紀に入ってから、ブリティッシュ・エイジアンの若者の間でのヒップホップや R&B の人気の背景には、「黒人性」との同一化の契機がみられるとのことである。だとすればこれらの音楽ジャンルは、完全に無徴化された形というよりも、アフリカ系アメリカ人という集団との何らかの意味での結びつきが想定された形で受容されていることになる。

二番目に、栗田氏の研究報告に接する上で意識しておきたいのは、栗田氏の分析考察の対象が「ポスト・パッケージ時代」の音楽実践だという点である。過去半世紀以上にわたって世界の音楽産業は、録音された音楽をレコード会社が CD やレコード盤やカセットテープなどの物理的なメディアの形(パッケージ化された音楽ソフト)で大量に複製し流通させる、という形で牽引されてきた。パッケージ化された音楽ソフトはしかし、インターネットが普及するようになると、その重要性が衰えはじめ、いっぽう、コンピューター上のファイルを参照するという形で音楽が聴取されるという機会が、飛躍的に増加した。音楽産業の中で多国籍メジャーと呼ばれる巨大企業も、また独立系の小レーベル(いわゆる先進国の若者市場をターゲットとしたレーベルだけでなく、先進国で暮らす移民や第三世界の民衆などのエスニックな市場をターゲットとしたレーベルも含まれる)も、一連の変化への対応を迫られている。音楽産業にとっては、ライブコンサートや音楽フェスティバルなどの、音楽家がオーディエンスと対面して物理的な空間を共有する実践の重要性が、以前と比較すると増してきている。

そうしたポスト・パッケージ時代への移行に際し、ポピュラー音楽研究は同時代の題材へとどのようにアプローチしたらよいのか。そのことを考える上でも、栗田氏のこの研究は有益な示唆に満ちたものになっている。報告の第3節で栗田氏は、ブリティッシュ・エイジアンというエスニックな市場で現在どのような音楽や音楽家が人気なのかを知ろうとするには、ラジオでのオンエアやチャート番組、ソーシャル・メディアでの評判、音楽イベントのラインナップなどに注目することが有効であると述べる。また第5節においては、イギリスの諸都市で行なわれている南アジア系のイベントであるメーラーについての、エスノグラフィックな調査をふまえた詳細な記述が展開されている。それも、一回性のそうしたイベントの参与観察のみに基づくのではなく、イベントの方向性に影響を及ぼしうるさまざまな行為者(ラジオ局や文化団体のディレクターなど)へのインタビューをも俎上にのせながら、立体的な分析が行なわれているのである。

さらに、南アジア／インド班の研究テーマに引きつけて言えば、第3節で言及される「エイジア

ン性 (Asianness)」という語に特に注意を寄せたい。どのような文脈で、誰によって、何がエイジアン性として他者化・特殊化されるのか、あるいはされないのか。また、一連のプロセスにおいては、どのような構造から、何が排除され何が包摂されることにより、その構造の普遍性が仮構されているのか。これらの問いを考えていく上で、栗田氏の研究報告は有意義な知見を豊富に含んでいる。

以上、補助線のようなものとして役に立てば幸いである。



研究会当日の様子